

# 静岡の高校サッカー 戦後の球跡

48

静岡工は創部6年目の1951年(昭和26年)度、スポーツ祭を制して初めて県

の頂点に立ったのを契機に、上位グループに定着し、優勝争いに絡むようになった。しかし、最後の壁は厚く、跳ね返され続けた。

そんな静岡工に59年度、松永弘道(焼津市在住)が松永が率いて3年目、61年度の全国選手権県予選決勝で藤枝北を2-1で退けた。この年度の藤枝北は、

岡工は気鋭の指揮官の下、新たな歩み始める。監督に就任した松永は、有望戦力の発掘に取り組んだ。スポーツテストをもと

1965年度先発	守門	一和之義夫	一男守一昭
GK	DF	公成治	孝克三喜利
FB	DF	木倉屋	本山
HB	DF	沢下	崎下
FW	FW	岩木	小

## 静岡工 ②



1965年度国体県予選を制し、初の全国行きを決めて表彰式に臨む

た。FW陣の一角だった、当時2年の村越広(藤枝市在住)は「強い藤枝北に勝ったのだから」と、意気が上がったという。だが、決勝は藤枝東に3-0で屈し、勝負の厳しさを味わうことになる。

# 全国への壁 ついに突破

△を消化して、決勝に勝ち上がった。相手は藤枝北で、激しい攻防となったが1-0で競り勝った。

前年度の選手権予選決勝で、藤枝東に再試合も延長の末に惜敗。2年生GKで無念さを知る鈴木公一(日本軽金属)は「その悔しさがバネになった」と語る。

東海ブロック予選も勝ち抜き、臨んだ岐阜国体。1回戦で水戸商(茨城)と対戦した。念願のひのき舞台だったが、緊張感からか動きが硬く、前半に2点を失った。後半は動きが一転、3分に岩崎守(建築設計事務所)の右からのロングシュートで1点差とし、その後も追い上げたが、わずかに届かなかった。

全国初挑戦は初戦敗退に終わった。だが、国体本番のピッチを踏んだことは、貴重な経験となり後に受け継がれていく。(敬称略)

(ライター・加藤訓義)